

図書館だより



12月号

2024年12月16日
安田小学校図書館

■モチモチの木（3年生）

国語科で学んだ『モチモチの木』岩崎書店の作者である斎藤隆介さんの作品を、3年生が図書の時間に読みました。最初に担任の先生から読み聞かせがあり、その後本が配られました。

1ペアに1さつの本を手にした子どもたちは、自然と文章を声に出して読み始めました。方言がちりばめられた民話風の文章には、「わらし」「ひやくしょう」「一だども」といった今の子どもたちが日常生活で出会うことのない言葉がたくさん出てきます。音読するのはずいぶん難しいのではないかと思いましたが、授業の終わりに「好きなお話がありましたか」という先生の問いかけにほとんどの本の題名が上がるほど子どもたちは没頭して読んでいました。

斎藤作品に流れる切なさや自己犠牲が児童文学にふさわしいのかどうかについては賛否両論あると思います。ですが、『花さき山の』岩崎書店の「やさしいことをすれば花がさく、命をかけてすれば山が生まれる」という言葉に代表される「みんなで幸せになるために自分は何を行うのか」という斎藤さんの問いは、物語の形で子どもたちにしみとおりに、大人になっても人を内側から支えてくれるものになると信じています。



保護者の皆様へ「冬休み特別貸し出し」

懇談の期間中に、保護者の皆様へ本の貸出を行います。16:30まで図書館を開館しますので、気軽にお立ち寄りください。

冊数：お子様1人に対して2冊まで

返却日：1月14日（火）

お子様を通してご返却ください。



読書まつり「しおりコンテスト」の入賞者です。おめでとうございます。

ちしきの本を開いてみよう



『日本のことばずかん』

神永暁/監修 講談社



日本には色をあらわすたくさんの言葉があります。この本には「ふじ色」「くちば色」「くれない」といった色の名前が美しい写真といっしょにおさめられています。言葉を声に出して言ってみたり、本を外にもって行って色をさがしたりしてみましょう。同じシリーズで『そら』『かず』『はな』などがあります。

『消えたレッサーパンダを追え！』

警視庁「生きもの係」事件簿

たけたにちほみ/文 Gakken



動物園のドアが壊されて、貴重なカメばかりがぬすまれる事件が発生した！警視庁「生きもの係」のすぐで警部である福原さんが本当に解決した事件を紹介するノンフィクション。動物が好きな人はもちろん、はらはらどきどきする探偵物語が好きな人にもおすすめです。

『戦場の秘密図書館 シリアに残された希望』

マイク・トムソン/著 小国綾子/編・訳 文溪堂

「自分たちの街を守りたい」という思いから、戦場になってしまったふるさとに残った若者たち。いつ家に爆弾が落ちてくるかわからない過酷な日常なかで、それでも未来のために学びたいと考えた若者たちが選んだのは、みんなが集う図書館を地下室に作ることだった。

『イチから知りたい日本のすごい伝統文化 絵で見て楽しい!はじめての相撲(すもう)』

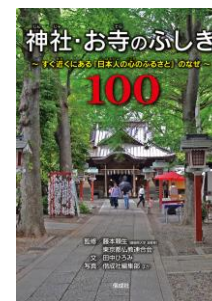
鍛山瑛一/監修 西尾克洋/著 すばる舎



力士の体が土につくか、土俵の外に出るかすると負けというわかりやすいルールを持つすもうですが、その文化についてはわからないことだらけではありませんか？実はほとんどの人が知らないすもうの常識を1ページ1見出しでくわしく教えてくれる本です。同じシリーズで、歌舞伎・茶道・落語の本もあります。

『神社・お寺のふしぎ100 ~すぐ近くにある「日本人の心のふるさと」のなぜ~』

田中ひろみ/文 偕成社



「大きな鈴は、なんのためにあるの?」「ぎざぎざの白い紙はなんなの?」といった疑問に答えてくれたり、神社やお寺にお参りに行ったとき、今まで気にもとめていなかった新しいものの見方ができるようになったりする中~高学年向けの入門書。

『あたらしいみかんのむきかた』

岡田好弘/作 小学館



みかんの皮で作る、全く新しいアートの本。1つ分のみかんの皮を、どこもむだにすることなく丸ごと切り開いて生きものの形を作るので、その展開図は大人でも頭をひねるようなこみいったものばかりです。算数の図形が好きな人は挑戦したくなるかもしれません。